浄土 第62巻 1号(毎月1回1日発行)平成8年1月1日発行 昭和10年5月20日第3種郵便物認可

浄土

monthly
JŌDO
1996・1

1996 1 Janualy

法然上人鑚仰会・発行

日本テレコム

咲いたら、幸せ。

楽しい、嬉しい。
ちょっと切ない、なつかしい。
いろんな話をしたり、聞いたり。
そんな何気ないことが、人と人との
固い絆の第一歩。
それぞれの人の、それぞれのお話に
花を咲かせるお手伝い。
安い市外電話の、0088です。

日本を楽しくする電話

0088

お問い合わせ・お申し込みは、日本テレコムお客様センターまでお気軽に。

フリーコール 0088-82（無料）
または 0120-0088-82
●受付時間 9:00〜23:00（年中無休）

台湾の寺院を巡る

—その一—

台湾の人々の日常の生活の中に、神様や仏さまが同居している。家族や友だちに相談するように、寺廟を訪ねる。神仏に祈り、相談し、願い、感謝する。信仰心を持つからこそ強くなれるのだ。エネルギッシュな台湾の人々のパワーの源はここにもあるのだろう。

写真撮影●長谷川章

▼寺廟の屋根のカーブは東南沿海の様式です。

龍山寺（台北）

▼中央は関帝像、両傍の四本の搭状のものは、
灯の塔でお金を喜捨すると名前が書かれて点灯される

関帝廟（高雄）

▼燭。信者が奉献する。

▼線香を持って拝拝する人びと

行天宮（台北）

沙泡宮（台南）

▲廟の屋根の装飾。三人の老人は福禄寿を示す。

帝爺公（高雄）

▲巨大な関帝の像。武神なので剣を持つ。

鹿耳門聖母廟（台南）

▲天上の将軍や神々の像。天上三十六将の一部。

▲中央に媽祖像を安置してある　天后なので　額には徳は、蒼空（すなわち天）に配すとある

浄土 1996/1月号　目次

カラーグラビア ……………………………写真＝長谷川　章　3
法然上人の心を探る ……………………………藤堂恭俊台下　8
インタビューご縁にみちびかれて ……………中村　元　16
台湾の宗教 ……………………………………………丸山　宏　26
魅せられて映画に ……………………………………丸林久信　32
外国で生活して………………………………………山内昌之　40
子年史談…………………………………………………細田隆善　48
表紙は語る　野草花ごよみ ………………………石井敏之　15
コラム ………………………………………………………56　57
Ｊフォーラム …………………………………………………61
事務局便り ……………………………………………………68
編集後記 ………………………………………………………70

表紙題字＝浄土門主　中村康隆猊下
表紙撮影＝石井敏之
アートディレクション＝近藤十四郎

巻頭連載

人間の性（さが）

――法然上人の心を探る（4）――

大本山増上寺法主
藤堂恭俊台下

晩秋と言えば十一月の季節をあらわすが、北から南へ細ながく弓状を呈する日本列島では、地域によってその風情を異にする。十一月の初旬に、三〇センチの積雪のあった奥州岩手の里からご縁を頂き、浄土宗寺院住職の檀信徒葬に、導師を勤めることになった。降雪と寒冷に危惧のおもいを抱きながら北上したが、幸い仏天加護のもと小春日和にめぐまれて、無事大役を果し得た。

故住職は八十歳を迎えた平成五年秋十月、一宗から杖を頂戴し、「功徳山寿杖たまわり菊に佇つ」と、一句を詠んでいた。功徳山一白院大蓮寺の住職であったこの老僧が、一宗から杖を頂戴して帰寺すると、それを讃えるかのように菊の花は咲き匂っていた、というのである。その拝領の杖は、浄土門主を介して阿弥陀如来から頂いた寿杖だ、と受けとった老僧の俳句にあやかって、「拝領の杖に曳かれて里帰り」と、拙句を尊霊に捧げた。

この老僧は清廉潔白で無欲な人望の厚い人で、復員後、寺門の興隆と檀信徒

の教化、社会浄化に尽力しながら、俳句に後半生をたのしんだ。数多い遺作のなかに「半分にとどかぬ吾や去年（こぞ）今年（ことし）」という一句がある。おそらく七十歳前後にして至り着いた心境であり、「この一句を授り半分を号とす」と綴っている。私には未見の人であるが、お人柄そのままをあらわし、親しみを深くした。俳句の大奥にも、念仏の極地にも至り得ない中途半端な半人前の私という内省こそ、凡夫の自覚であると言ってよい。

法然上人は『往生浄土用心』のなかで、いうところの凡夫について

凡夫と申、この文字をば、狂酔のごとしと弘法大師釈し給へり。げにも凡夫の心は、物ぐるひ、さけにゑいたるがごとくして、善悪につけて、おもひさだめる事なく、一時に煩悩百たびまじはりて、善悪みだれやすければ、いづれの行（ぎょう）なりとも、わがちからにては行じがたし。

（『拾遺黒谷語燈録』巻下所収）

と、仰せになっている。

　このなか「凡夫・狂酔」の四文字は、弘法大師空海の『秘蔵宝鑰』巻の第一異生羝羊心に関する説明文から採られた表現である。人は理性によって善悪正邪というものの道理を心得ていても、ひとたびむさぼりの心が起り、怒り腹だちの心がおこると、体全体が心得ていたはずのものの道理に従うことができず、遂に欲に溺れ、怒りの炎に焼れてしまう、ありのままの人間を凡夫と呼んでいるのである。そのような現実のいつわりのない自分自身をしかと見つめるならば、「わがちからにては願行そなはる事かなひがたくて」、到底自力による出離生死はなしがたく、願っても画餅に等しいぞよ。と警告されたのがこのお言葉である。

　私はついさき頃、落慶式の引出物にしたいから、「煩悩即菩提」の五字を染筆するように依頼を受けた。時にためらいなく即座に、この句はまことに結構な「覚（さとり）」の内容をあらわしているが、浄土門とは異なった般若の空観に基づく世

界という外ない。少なくとも宗門寺院から差し上げるのであれば、浄土門にふさわしい文句であるのが穏当でなかろうか、と注意を喚起し、たとえば

> 凡夫の人、煩悩成就することあれども、またかの浄土に生ずることを得れば、三界の繋業（けいごう）畢竟じて牽（ひ）かず。すなわちこれ煩悩を断ぜずして涅槃の分を得。いずくんぞ思議せん。
> （『無量寿経論注』巻下）

という曇鸞大師のお言葉こそ、浄土教思想信仰の特徴を素直に表現しているから、このなかの「不断煩悩得涅槃分」の八字を頂き、染筆すればいかがであろうかと同意を促した。

周知のように「煩悩即菩提　菩提即煩悩」とは、天台大師智顗の『摩訶止観』第一下に記載する文句である。煩悩と菩提とを永く隔絶させるのは、煩悩に基づいて生死（迷）の果あり、菩提に基づいて涅槃（悟）の果あり、と捉える凡夫の迷執である。それは煩悩と菩提を自分の外に対象化して捉えることに基づく。「煩悩即菩提」はこの対立する両者を対象化するはたらきを否定するところ

に成りたつ。したがって、厭離すべきは生死であり、欣求すべきは浄土であるという、浄土門特有の願生思想信仰とは、永く袂を分たなければならない。つまり、阿弥陀仏の在ます浄土に迎えられると、煩悩を断ち截らないまま、おのずから涅槃と等しい境界を得ることができるのが、願生思想信仰の特徴である。それは「念仏衆生摂取不捨」という阿弥陀仏の大願業を縁とするからである。

法然上人は『無量寿経釈』のなかで

> 往生浄土の法門は煩悩の迷いを断ぜずといえども、弥陀の願力によって極楽に生じて、永く三界を離れ六道生死を出づ。故にこの教えをもって頓中の頓となす

と指摘されているのは、曇鸞大師の「不断煩悩得涅槃分」を受けつぎ、あまつさえ、頓教中の頓教と位置づけられたのである。つまり煩悩を一一断じて「覚（さとり）」を得る漸教に対し、煩悩を断じないで、凡夫がただちに浄土に往生し得る教えを頓教と性格づけたのである。

最後に佐藤春夫先生の『法然上人頌』を転載して、拙稿の不足を補いたいとおもう。

一、光明は隈なくそそぐ　限り無き命に生きよ
人間の智恵勿たのみそ　み恵は人をえらばず
ただ頼め阿弥陀仏と　おしえたるいみじさのわれらが祖師や

二、煩悩を絶てとは告らず　みだれる心もゆるし
人間の性のまにまに　み仏の国に往き生く
この道は誰がひらきし　なさけある慕わしのわれらが祖師や

表紙は語る

野草花ごよみ
1月
・
スイセン
(ヒガンバナ科)

水仙。野性のスイセンを求めて城ケ島へ行ったが、あるにはあるが、ほとんど花が折り取られている。地元の人に聞くと、正月の花ということで折って行く人が多いとのこと。やっと花を見つけたが八重咲。海を背景にと思ったら逆光。写真はなかなかうまくゆかない。地中海沿岸原産でシルクロード。中国経由で日本に渡来したそうであるが、野性状態のものについては諸説ある。

撮影場所　神奈川県城ケ島

表紙Photo／Report
石井敏之
1945年　北九州市生
1964年　東京大学理科二類入学
東京大学文学部哲学科卒業後
1973年　東京都職員
1995年　都立東村山中央公園管理所長
1975年頃より、野草の写真を撮り始め
現在、数千点に至る。
そのなかから厳選し、表紙写真とする。

『浄土』新年号 新春特別インタビュー

多くの仏教経典を訳し、その難解だと言われている教えを、私たちに分かりやすい平易な言葉で著し、伝えてくださっている仏教学者中村元氏。八十三歳となった今でも研究に打ち込むとともに、東方学院長として広く人々に釈尊の教えを説いている。新春にあたり、この中村氏に、仏教との出会いから、またその教えを今日にどう生かすかなどをお聞きした。

中村 元氏に聞く……①

ご縁にみちびかれて

「仏教との出会い」病気が機縁に

――中村先生といえば、仏教に関心のある人ならばそのご著書を読んだことがある、というほど人々に知られ愛されている先生ですが、仏教とはいつごろに出会ったのでしょうか。

中村　私は島根県の松江で大正元年に生まれました。家は浄土真宗の檀家で、祖父母、両親みな神仏への信仰の篤い人でしたから、生まれたときから宗教に親しんでいたといえますね。しかし、松江で真宗というのは珍しいんだそうです。松江は殿様が松平でしたから、浄土宗が多く、松江の親類はほとんどが浄土宗ですよ。でも、私の家が真宗になった由来は、大阪の陣までさかのぼることができるそうですから、まあ、かなり古い真宗の門徒と言えると思います。

こういう家でしたが、私が自分から進んで仏教に関心を持ったといえば、中学に入ってすぐに腎臓を患った時でした。大正の末のころでした。一年間病床に臥せっていました。くる日もくる日もただ寝ているだけ。辛いものですね。それからまた、この病気で学業が一年遅れるということもショックでした。自分だけが世間から取り残されるような気持ちになってくるんです。

それで自然に宗教や哲学の本を読むようになりました。「人生とは？　死とは？」などということを、本当に真剣に考えましてね。で、自分ながらに、「私はもう、現世の方ではとても役にたたない人間だ」などとさとりました。

これが私の仏教との出会いでした。

おかげさまで病気は回復したのですが、回復後はどこか世俗とかけ離れた少年になってしまっていたようです。そして、この体験が私の人生に大きな縁となったといえましょう。結局、そのままインド哲学の道に入ってしまったのですから……。

教育熱心だった家庭

――しかし、当時としては、人々が大学まで進むことは珍しかったのではないでしょうか。

中村　そうですすね。しかし、私の家では母親が非常に教育に熱心でした。

私の家は、祖父が松江藩校の教授で、維新後は今日でいう松江の市長などもしましたがずいぶん紆余曲折があったそうです。その当時、藩士というのは、今で言えば、倒産した会社のサラリーマンみたいなものですから、やはり教育の必要性を強く感じていたのではないでしょうか。また、それ以外にのびていく道はなかったんじゃないでしょうか。これが商家とか農家でしたら、それなりの生き方も定められていたでしょうが、そうではありませんでしたから、やはり子供たちには教育が必要だと考えたのでしょうね。

中村元氏に聞く…①

また、父親は生命保険会社のアクチュアリーというのをしていたんです。アクチュアリーというのは保険数学といいましょうか、その学者でした。晩学の人でしたが、本もありますよ。保険数学では日本で最初の本じゃないですか。こういう環境でしたから、母も子供の教育に力をいれたのでしょうね。

――そのように、教育熱心なご家庭でしたら、先生が大学でインド哲学の道を選ばれたことにはがっかりされたのではありませんか。

中村　親はがっかりしたでしょうね。私が官公庁などの役人とか、大会社に入るような学問を選ぶのなら喜んだでしょうが、インド哲学ではそんな可能性がありませんからね。がっかりしたでしょうね。でも、理解はしてくれました。

――先生としては病気をなさって、いわゆる世の無常を感じて、そして大学ではインド哲学を選ばれた。これはごく自然の道だっ

たわけですね。

中村　そうです。この当時は西洋哲学をとるのが普通でしたが、私は西洋哲学はなんか冷たいところがあると感じたんです。それに対して仏教の教えとか学問は温かいです。これは病気中に読んだ本などで感じたことで、だから私は、はじめから大学はインド哲学と決めていたのです。

これも因縁ですね。因と縁が目に見えないところで働いて、それに導かれて行くというのでしょうか。

人間は変わらない

──それで大学に入って学んだ宗教と、それまでに見知っていた宗教とでは、イメージ的に何か変わりましたか。

中村　だんだん変わりましたね。それは、最初に与えられた宗教は日本の諸宗派の宗教ですね。幼いころから見知ってくるのはこれですね。ところが、学問をしまして広く見渡すと、宗派を超えた何ものかがある、と思うようになりました。

──お釈迦さまの説いた仏教と、日本の仏教との違いなども感じられましたか。

中村　それは感じましたね。非常に違いますね。しかし、私は違ってもいいんじゃないかと思います。

と申しますのは、仏教は広がるとともに、時代に応じ、民族に応じて変わったわけです。また、変わる必要もあったろうと思うんです。お釈迦さまが直接話していた人々にはそれまでの宗教もありますし、土地としての習慣や伝統といったものもあります。そうした中で生まれたものが、中国や日本というように、まったく違うところへ伝えられて来るのですから、違って当然だと思います。といって、お釈迦さまの教えが、基本からまったく違ってしまうというのではありませんよ。その表現方法などが、それぞれの土地、時代、民族

によって違ってくるのです。

ただ、将来に向かって、今のままでよいかどうかというと、これはまた別問題になってきますね。

――お釈迦さまが説法していた時代からすでに二千数百年経っているわけですが、お釈迦さまの時代の人間と、現在の人間と比べて、その本質に変化はあるでしょうか。文明が進歩したように、人間も進歩しているでしょうか。

中村　変わっていないですねぇ。だからこそ私たちは仏さまの教えを仰ぐんですよ。人間が変わっていたら、良い方に進化していたらその必要もないわけです。知識や学問は、お釈迦さまの時代からずいぶんと進んではいますが、人間そのものは、残念ながら、お釈迦さまが見た人々と何も変わっていないんですねぇ。

――先生が『真理のことば』としてお訳しになったお釈迦さまの経典『ダンマパダ』に、「心は、捉え難く、軽々とざわめき、欲するがままにおもむく」とありますが、人の心はこのときのままだ、ということですね。

中村　そうです。悲しいことですが。

――人間の本質は、先生のおっしゃる通り何も変わっていませんが、では、日本に仏教が入って来て、すでに千数百年経ちますが、日本人の心に仏教の心が浸透していくのにどのくらいの時間がかかったと思われますか。

中村　さあ、それは難しい問題で、私にはよく分かりませんが……。

普通、日本仏教の宗派は鎌倉時代に現れたといわれますね。しかし、それ以前にも仏教は広がっていたわけで、大きなお寺があったわけでございましょ。だから日本へきて、日本の精神的風土に定着するのにも相当の年月がかかったでしょうが、また、鎌倉以後も変わっていますよね。それから明治以後は廃仏毀釈を経験していますから、これまた大きな

試練でしたね。

しかし、私は、こういうものを通って将来に伸びていくんじゃないかと思います。

翻訳は分りやすい日本語で

――現在、一般の人々にとって、仏教は難しいというイメージが定着しています。今、先生が将来伸びていくとおっしゃいましたが、この難しいというイメージがとれないと、それもなかなか難しい。それに現在のように仏教が難しいものだったら、過去においても一般の人々が理解できたかどうか疑問にも思うんです。

中村　そうです。もとはもっと分かりやすいものだったんです。だから人がついてきたんですね。パーリ語の原始仏典といっても、それはその時代の俗語で書かれているんです。人々が普段使っている言葉なんです。文章語で書かれたものではないんです。

中村元氏に聞く…①

――先生はこれまで沢山の仏典を訳されてこられましたが、訳す上で特に注意されたようなことはあるのですか。

中村　そうですね、私はとにかく日本人に分かりやすい日本語で著さなければいけないと思うんです。翻訳でも論説でも一般の人が普段使っているような、分かりやすい言葉を使っております。

かつて原始仏典を訳したときに、「中村の訳は平易すぎて、ありがたみがない」と言われたことがありましたが、人々が分からないような言葉を使って、自分たちだけで満足したってなんにもならないでしょ。やはり多くの人が理解できるようなものにしなければ、訳したって意味がありませんよね。

そして、この場合参考になるのが、平安末期以降のかな法語なんです。浄土教の方では法然上人がきっかけをおつくりになりましたね。

――先生が仏典などを翻訳していて、日本仏

教との違いなどを感じることはありますか。

中村　人間を見つめておられたということにおいては変わりないと思います。ただ、昔の仏教は、あるいは大陸の仏教は、現世から逃れて来世を仰いでいた、というかたむきがありますね。それにひきかえ、日本で根をおろして近年に発展している仏教は、現実生活にそくして教えを説く、というようになっていると思います。

——仏教は、伝わっていく間にその地域地域にある習慣、習俗、道徳、倫理などと融合しながら広まってきていると思うんですが、日本でもやはり、日本古来の八百万の神々とか、祖霊崇拝とかとうまく共生してきたのでしょうか。

中村　そう言っていいと思います。そしてそれが本当の仏教を捨てたとか裏切ったということじゃないと思います。

仏教はもともと、世の中のいろいろの思想とか儀礼の存在意義を認める大きな立場から認めてあげるような傾向があるんです。だから、仏教はどこへ行っても、その土地土地にそれまであったものを頭からつぶしてしまう、というようなことはしないんです。たとえば、民衆がこういうことをしたい、というなら、それもさせてやってもいいいんじゃないか、という。

つまり方便門といいますか、入口の門として認めるんですね。

日本は教育に宗教を入れることを嫌がっている

——そういう意味でいうと、日本は明治になって西洋思想や文明を取り入れるようになった。そして先の戦争に負けてから、さらに西欧、とくにアメリカのものをいい悪いもなしに取り入れています。これで日本人もずいぶん変わってきているし、またそれて、それまであったもの、習慣や考え方なども失い、捨ててしまったものも多いよう

に思います。仏教については特に多いと思うんですが、先生はこうしたことをどう思いますか。

中村　ええ、多いですね。しかし、どこまでは捨てていい、どこからは捨てちゃいかんということはしるしがつけにくいですが、ただ、敗戦というのは大きなことでしたからね。敗戦とともに、古くからあったものを全部捨てちゃえということになったわけですね。

　ところが、同じように戦いに負けたドイツはこうではなかった。ドイツでは敗戦を何回も経験していますから、「今度も負けちゃった。でも、西洋文明の優れたものはおれたちが伝えているんだ」という気持ちがあるんですね。

　だから、戦後、日本では進駐軍があぁせいこうせいと言うと、日本の偉い人たちはさっさと受け入れてしまいましたが、ドイツ人は反抗したんですよ。これは大きな違いだと思いますね。

中村元氏に聞く…①

　それで、あるとき、このことをある新聞のインタビューで言ったら、この部分は消されていました。そのくらい、日本はアメリカを受け入れ従うことが市民の間に浸透していますね。

——教育も相当変わってきていると思いますが。

中村　そうですね。戦後いろいろな問題が起きたのも教育の影響が大きいですね。

——教育については、近年、現在の知識偏重教育がいいかどうかと問題になっていますね。いじめとか、また、今回のオウム事件で、それがますます声高になっています。

中村　教育問題ではっきりお心にとめておいていただいていいと思うことは、日本では教育に宗教を入れることを嫌がっていますね。ひじょうに敏感になっている。ところが反対にドイツでは公教育においては宗教を教えること、となっているんです。ドイツの基本法、つまり憲法ですね。これにちゃんと言われていますね。

いるんです。日本とは正反対でしょ。
これは、進駐軍が日本の宗教に好意的じゃなかったということがいえるでしょうね。また、日本の知識階級もそうですね。
この点などを今の仏教者は声を高くして言ったらいいと思います。今の仏教者は過去ばかりを見ておられるように見えます。○○上人の何百年遠忌というような。そういうことじゃなくて、外国にもっと目を向けて、宗教教育を公に認めているようなところをもっと掘りおこされたらいいと思います。
――ドイツでは公教育で宗教が教えられているんですか、知りませんでした。日本とは大違いですね。日本でもこうしたことがしっかりなされていれば、今回のオウム事件などは起こらなかったでしょうね。しかし、現実には、先生が言われたように、日本では教育に宗教を入れることを嫌っています。そして、今回のオウム事件が起きて、世間では「宗教はこわい」という見方すら出てきています。こういう中で仏教の本質というか正しい仏教を伝えていくにはどうしたらよいと思われますか。
中村　私は、いつも思っているんですが、お寺のご住職さんたちが仏教のあたたかなところを伝えていただきたいですね。葬儀や法事、また行事など、檀信徒さんとのご縁のある機会をとらえて伝えていってほしいですね。
（つづく）

今日の台湾人の宗教

丸山 宏

台湾は、日本の隣りに位置している地域で、成田から飛行機に乗れば約三時間足らずで訪れることができる。この近さにありながら、例えば、日本の高等学校までの教科書に台湾の文化や宗教についての記述が、殆ど見られない。観光で訪れる人も、代表的な観光地を駆け足で回り、おいしい中華料理をいただいて帰って来る場合が多いのではなかろうか。台湾は近くに位置していても、台湾人の宗教を深く知るのは容易ではないように思われる。特に表面的には、大きな廟や寺院の華麗を通り越した、けばけばしさに驚かされる一方で、これは日本とは違うと感じながらも、どこがどう違うのか、なぜなのかということを考えることは後回しになりがちである。

台湾の面積は、九州と同じぐらいで、人口は約二〇〇〇万人である。そのうち、約三〇万人が山地同胞と称される先住民族の人びとである。その他の圧倒的多数は、中国大陸からやって来た漢族の人びとである。先住民族の人びとの宗教は、精霊崇拝を中心とする宗教である。近年は、キリスト教のうち、特にプレスビテリアン派の努力があって、キリスト教へ改宗する山地同胞も多く、先住民族の社会的な権利の拡大を目指す運動と外来の宗教が結びついている点に特徴がある。

漢族の人びとの宗教について理解する時、歴史的に漢族の人びとがどのような時代を経て今日に至ったのかを無視することはできない。台湾の歴史は、中国の辺境の島嶼(しま)であるという位置のため、常に外部の強大な権力の影響を受ける立場に置かれた。「悲情城市」という映画の登場人物が、「俺たちは一度も自分で自分の主人になったことがない」と言って嘆くシーンは印象的である。海外へ渡航する危険を冒して、食ってゆくことが苦しい福建の故郷から台湾へと移住し、先住民族と闘い、あるいは漢族どうしでも闘いながら、交易や開墾に努めた先祖たちの苦しい辺境での生活の中の宗教が、今日の宗教の原像である。

辺境社会の中での緊張感は、もともと神仏にすがる気持ちの強い移民たちに、一層強い信仰心を持たせることになった。神仏を、福建の故郷の寺廟から運んで来るのは、存外むつかしくない。故郷の寺廟のお線香を捧げる容器である香爐から、ひとつまみ灰を取って、紅い色の小さい袋に入れて、お守りのようにひもで首にぶら下げて、とにかく台湾にたどりついてから、また容器をさがして灰を中へ出して、そこに線香を立て始めればよいのである。このことを分香という。この方式で、まず爐の灰から始めて、後は余裕が出てくれば、神仏の像や、祠や、はてはコンクリート三階建ての大きな寺廟を建てるに到るのである。現在は大きな寺廟も、はじめはこのようにして分香して持ってきたものが、成長した結果である。

　どんな神仏が分香されて来たのかというと、土地の豊穰と安全を守る土地公、都市の冥界の裁判官で、人が死ぬとまず「お前も来たか」と声をかけられるという城隍神、航海安全の女神である媽祖、女性の死産を防ぎ、子供の成育を見守る臨水夫人、生前に貧しい人びとを無料で治してあげた医者が死後に神に祀られた保生大帝、激しい発熱と下痢をともなう流行病を引き起こす恐るべき疫病神的な一面を持つ王爺、などが代表的な神である。仏教に属する神としては、観音菩薩に絶大な人気があって、これは女神と化していて、観音媽とも呼ばれ、道教の廟の中に並んで祀られていることも多い。以上の神仏の性質は、民衆が辺境社会の中で暮してゆく時の、生き死に、安全に関する最低限の願いに答えてくれる力を持つものであることが特徴である。

　台湾は、明朝末に鄭成功の亡命政権が破れた後に、まず満州族の清朝の統治を受けた。そして、ちょうど今から一〇〇年前の一八九五年から、日本による植民地支配を五〇年の長きにわたって受けた。この日本統治時代は、台湾の宗教にとって厳しい時代であった。各

地に日本の神道の神社が建てられ、在来の寺廟の神像が没収される事件も起っている。仏教界も、日本仏教の各派への帰属の動きが見られ、一九二二年には、そのための全台湾的な組織である南瀛仏教会が組織された。南瀛とは、南海または南島を意味し、台湾を示している。戦争末期の皇民化運動という台湾人をすべて天皇の民にして戦争に奉仕させる政策が、漢族の宗教に加えた打撃はきわめて大きかった。日本人がまじめに今日の台湾の宗教を考える時、この時期のことは十分に知る必要があると思われる。

一九四五年以降は、国共内戦の結果、国民党とその政府関係者などが台湾に移ってきた。この時に新たに台湾に移ってきた人びとは外省人と呼ばれ、台湾出身の内省人との間に摩擦が起った。戦後しばらくは、台湾の本土文化の代表でもある民間の宗教活動は、かなり低く位置づけをされたのである。このあたりにも先に引いた主人になれない気持ちが生じた。主権が中国に回復されても、辺境文化の境遇はすぐには改まらなかったのである。ただし、重要なこととして、この時期に揚子江下流の江南の大きな寺院の高僧たちが台湾に亡命し、台湾の仏教革新に寄与し、今日見ることができるような台湾仏教界の質的な高さにつながったことが指摘できる。さらに、台湾では中国大陸における文化大革命のような性急で破壊的な政策が行なわれなかったことが、今日の台湾の宗教の発展にとって大切であった。

一九八七年七月を期に、台湾では戒厳令が解除された。このことは、世界的な冷戦の終結の一つの現われである。これは、民間の宗教活動をはじめとする台湾の本土文化が以前にも増して高く位置づけられる大きな契機となった。台湾では、それまでも、道教・仏教・カトリック・プロテスタント・イスラム教のほか、多くの新興宗教が政府に認可され活動していたが、同じ八七年には、大陸では今な

おきびしく弾圧されている一貫道すら解禁され、公然と活動できるようになった。これは、台湾社会が一元的な社会ではなくて多元的な社会へと成長した一端を示している。中華人民共和国の指導者の無神論とはちがって、李登輝総統が敬虔なキリスト教信者であり、かつ仏教界が行なう慈善事業に深い理解を示していることはよく知られている。これを、選挙を控えた票集めのせいだと決めつけることはできないであろう。

　私自身が台湾の宗教を調べる中で興味を持ったのは、高雄県の海岸沿いの村の普通の人びとの宗教心である。道教式のお葬式を見学していると、道士がもちろん主に儀式を進めるのだが、死者の霊を地獄から救出する儀式の時は、遺族の家で普段からよく祀っている地方神の小さな神輿（みこし）も参加する。紙と木で作った一メートルぐらいの高さの地獄の門を模した箱をこわすのは神輿の役目である。箱の中には死者を形どった人形が入っていて、取り出してやるわけである。神輿に乗ってやってくるとされる神のなかには、西天仏祖も含まれると村人はいう。地獄の門を壊して死者を救う演技が葬式のプログラムにあることにまず驚くが、こうしてやるのが死者の供養になるのだと考えているのである。本当に地獄から出たかどうか、死者の霊に直接尋ねることも多い。死者の霊を霊媒に憑（つ）けて問答を交すのである。この問答はしばしば大変に感動的である。死者が去る時に心配が残るといけないので、あたたかい言葉をかけることが多いからである。

　亡くなった老妻の霊に、残された老夫が「お前の考えはよく分っているから、お前の考える通りにこれから自分は生きて行くから、心配するな、それでいいか」と声をかけるシーンは感動的であった。このような情景に台湾の宗教の重みが最も生き生きと表われているように思われ、私を捉えてやまないのである。

（東北大学助教授）

人の目 レンズの目

連載

魅せられて映画に〈私流映画講座Ⅲ〉

丸林久信

昭和十九年六月中旬、ビルマ(ミャンマー)は雨季の季節である。

怒江反撃撃滅作戦。その作戦はこう呼ばれていた。敵の反撃を怒江河際で撃滅する作戦という意味である。

ビルマ国境を過ぎ中国雲南省に入ると、重畳たる山岳地帯が怒江までつながっていた。

前線基地の拉孟、騰越の両守備隊（菊兵団の金光、蔵重部隊）は雲南遠征軍十七個師団兵力三十万の大包囲下にあり、玉砕寸前の状況だった。我々の聯隊は両守備隊の救出を命ぜられ、急拠この地に投入されたのである。

夜半、どしゃ降りの雨をついて、総兵力四百人に満たない兵員を乗せた無灯火の自動貨車は、畹町、芒市を経て、目指す龍陵に向った。

自動貨車のエンジンの調子はよかったのだが、砲弾や爆撃で出来た大穴に落ちこむと、エンジンは悲鳴をあげる。そのたびに、ぬかるみに足をとられた車輪を押しあげ、ロープをかけて引っぱったのである。

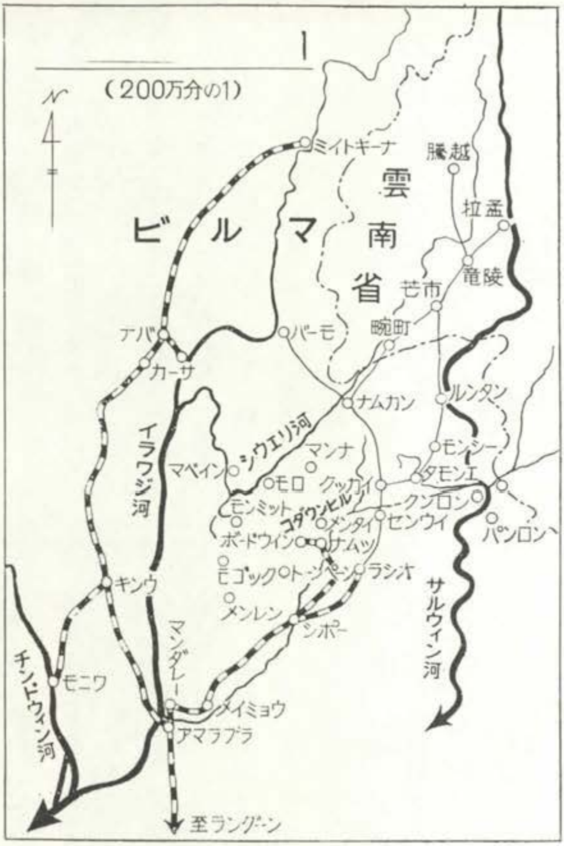
初陣というには余りにも侘びしい出陣だった。

もうあと三時間もすれば夜が明ける。闇が抜けたように照明弾があがると、空が明るく、龍陵の街をすっぽりと包んだ山々の稜線のシルエットが、くっきり浮かびあがって見えた。

すぐ間近で、榴弾の炸裂音がひっきりなしに聞こえる。鼻をつままれても判らぬ暗い山路を、我々は押し黙ったまま、龍陵峠から孟昌街（拉孟に近い街）に向って行軍をつづけた。

黎明。部隊は達磨山山上の敵に攻撃をかけた。と、それを待っていたかのように、敵の火器が火を噴いた。間断なく撃ちこんでくる山砲、榴弾、追撃砲弾、そのたびに山は地響きをたて鳴動する。そしてまた、雨のように降りそそぐ機関銃の弾幕。我々の足はその場に釘づけにされ、一歩も前に進めない。

夢中、ただもう無我夢中、泥濘の中を這い



1
(200万分の1)
N
ビルマ
雲南省
ミイトキーナ
騰越
拉孟
竜陵
芒市
畹町
バーモ
ナバ
カーサ
ナムカン
ルンタン
イラワジ河
シウエリ河
マンナ
マベイン
モロ
クッカイ
モンシー
タモンエ
モンミット
コダウンヒル
クンロン
メンタイ
センウイ
ボードウィン
ナムツ
パンロンへ
モゴック
トージベン
ラシオ
キンウ
メンレン
シポー
サルウィン河
マンダレー
チンドウィン河
モニワ
メイミョウ
アマラプラ
至ラングーン

野戸老
塔白
寺龍雲
山龍雲
陵龍
路
公

ずり廻り、やっとみつけたタコ壺（一人用の壕）に頭から飛びこんだ。どっぷり水に漬ったまま、首だけ出して敵の位置を探す。不意に榴弾が炸裂して、土砂と泥水が、ざあッと音をたてて壕を覆う。あわてて顔を水に埋める。

静かになったところで、おそるおそる顔をあげ、外の様子を窺う。突然、思いもかけず、私の直ぐ右横のあたりで、激しい軽機関銃の射撃音がした。壕から身体を乗り出した岡村上等兵が、狂ったように射ちまくっていた。

「危ない、オツリがくるぞ！」叫ぶ間もなく、応戦する敵の機関銃の一斉射撃。岡村の身体がその場につんのめった。私は地面に伏せたまま、どうしてやることも出来なかった。斃れた筈の岡村の軽機がまだ火を噴いていたが、それも直ぐに止んだ。

「畜生ッ、貸してみな！」怒声がした。

岩陰から跳び出した応召兵の吉川伍長が、岡村の軽機をもぎとると、あわただしく弾倉（連発銃の補充用弾丸）を装鎮して射ち始めた。だが、ものの数秒とはもたなかった。ぷつんとも言わずに、そのままうつ伏してしまった。

「ああ、死んだ方が楽だ！」私は目の前が真っ暗になったような気がした。

と、こう書いてくると、私がいかにも冷静に戦況をみていたようだが、実際は、情なくも殆ど地面にうつ伏していたのだ。見たものは最初に砲弾の着弾したときの泥水の土煙り、岡村の斃れた瞬間、吉川伍長が跳び出したときの様子ぐらいだ。私の眼に鮮やかに映ったものは、残念ながら、ほんの断片に過ぎなかったのである。

人間の目は、集中的に要約された一点、こころに焼きついた強烈な印象に絞られたものをみる。そんなように出来ているらしい。

「お前は映画人だろ、目をそむけるな！『カメラ』、レンズの目を意識しろ！」そう自分に言いきかせた。そして、このあとの戦闘からは、つとめて非情に、すべてを見届けて

やろうと努めたのである。
私は収容所で、この龍陵の戦闘の寸景を、シナリオ風にカメラの目を意識してノートしたのだった。

○　幻想・斬壕の中（黎明）

雨が激しく降っている。
榴弾が近くで炸裂し、土砂が壕を覆う。
つづいて機関銃の掃射が雨霰である。
兵士A、腕を耳に当てている。

私「おい、どうした？」
A「いけねえ、オシャカだ」
時計が停ってからだいぶ経っている。
A「糞うッ！」
と、榴弾が間近で炸裂。
A「ぎやうッ！」
悲鳴とともに頬を押さえてうずくまる。
その掌に肉片と皮がベロンとぶらさがっている。顔半分は血で真っ赤だが、傷の痕はみえない。

A「ああ、俺じゃなかったのか」

○　別の壕Ⅰ

首から上のない岡村。指でしっかりと引き鉄を押えている。軽機の音がやんだ。弾倉の弾丸が無くなっている。

○　敵陣の壕A・B・C……。

機関銃の一斉射撃が火を噴いている。

○　別の壕Ⅰ

岡村の身体が蜂の巣のよう。その場に崩れる。

○　別の壕Ⅱ

吉川伍長が岡村をみる。
吉川「畜生ッ！」
壕を跳び出す。

○　別の壕Ⅰ

吉川、走り寄り
吉川「貸してみな！」
　軽機をもぎとり、敵に向って射つが、
　激しい敵の弾雨で斃れる。

○　塹壕の中
　私、銃剣の先で、赤土に自分の名を刻(きざ)む。兵Aが近づき
A「なにしてるんですかい、班長」
私「戒名を彫ってるのよ」
A「？　丸林久信……ヒ・サ・ノ・ブね」
私「こんなにいい名前だとは知らなかったぜ」
A「オレも彫っとくかな」
　雨が戒名の上を流れて降っている。

壕の中にいる限り人間（私）の目にはなにもみえない。僅かな間にみる黎明の空（仰角）、見渡せる限りの敵陣（パーン）、敵の銃撃の光り（z(ズーム)・u(アップ)）、私がみた限りの我々の壕の位置（移動にはパーン）。そして岡村の射撃の様子（z・u）などだが、カメラの目は非情である。敵陣の動き、敵からみた我々の塹壕（パーン、移動、クレーンなど）、首のない岡村の射画と斃れた瞬間（俯瞰(ふかん)・z・u）の血(ち)飛沫(しぶき)、血潮（近写(クローズ・アップ)・接写(アップ)）などさまざまなテクニックを使って、人間の目の見落したもの、観客のみたいものをみせてくれるのである。

　登場人物がいつもいる部屋に花瓶が置いてある。私たちは人物に目をやっていて、花瓶の存在をあまり気にしない。ところが、ふいに事件が起きた。花瓶は登場人物を殺人者にしたてあげた凶器になったのである。

　人間の目は、ひとつのものに集中すると、他の部分はみえないのに、カメラは登場人物の動きにつれ、折にふれて花瓶をみています。

　人間はさまざまな感情が働き、ことさらに見まいとすれば、他の部分はみないようにすることが出来る。

　花瓶のある部屋で、A、Bふたりの人物が

口論をしている。我慢をしているA。Bは冷笑してAをみつめる。Aは感情を制し、小刻みに震える拳が大写しになった。Bは罵声を浴びせて部屋を出ようとした。Aの眼が花瓶に注がれた。そして、花瓶を手にとった。Bは異様な気配を感じて振りむき、アッとなった。Aの振りあげた花瓶がBの頭上に……。花瓶が床に砕け散った。A、茫然となる。

大写し、クローズ・アップは典型的なカメラの目です。

花瓶はこの家の風格と凶器への暗示となり、Aの震える拳はAの感情であり、去りゆくBの背や花瓶はAの見た眼であり、ふり下された花瓶と倒れたBは、第三者の監督や観客の見た目で、散乱した花瓶は惨劇を起こしたAの悲痛な目と感情であり、カメラの非情な目でもあります。

レンズの目は、登場人物となり代わって、彼のこころと目になり、見たり考えたりするのです。

舞台をみる観客は登場人物の仕草（しぐさ）をみて、その人物の思っていることや、これからするであろう次の動作を想像したり、考えたりはするが、その登場人物になり代わって、そこに行ったり見たりすることは出来ません。

カメラの目は、机のなか、財布のなか、家の天井からみることも、ビルの屋上から飛びおりることさえ出来ます。

AとBとの口論、殺人事件に至るまでの経過を、あなたの目（人間の目）とカメラの目（カメラ・アングル）で、映像を遊んで欲しいと思います。

少し、気障（きざ）なようですが、前述の戦場風景を、あなたなりにふくらませ、臨場感あふれるものにして、硝煙に燻（くすぶ）る戦場を通して、戦争を否定し、平和への道を探っていただきたいなどとも思うものです。

――参考文献――拙著「映画製作ハンドブック」（黎明書房）雑誌「公評」（公評社）

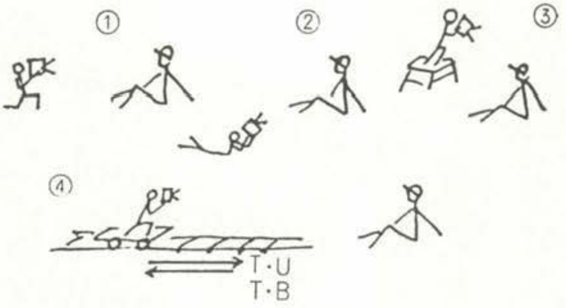
カメラ・アングル（角度）

①**アイ・アングル**　撮るひとの目の高さから見た角度。水平角度のこと。ごく自然なアングル。

②**ロー・アングル**　低い場所から見上げる角度。仰角という。

③**ハイ・アングル**　高い場所から見下ろした角度。俯瞰（ふかん）という。

④**移動**　被写体に向かって前進，後退移動の撮影。前進をトラック・アップ（T・U），後退をトラック・バック（T・B）。



⑤**パーン**　カメラを固定して水平に左右へ動かすパノラミック撮影。上下に操作するのをパーン・アップ（P・U），パーン・ダウン（P・D）という。

⑥**クレーン撮影**　起重機による撮影。移動を併用することもある。

⑦**ズーム撮影**　ズーム・レンズを使って画面を変化させる。ズーム・アップ（Z・U）とズーム・バック（Z・B）とある。

連載

外国で生活して⑥

トルコとアイヌ問題

東京大学教養学部教授
歴史学
山内昌之

TURKEY

　外国に住んだことがある人なら誰でも、日本に日本以外の民族がいるのか、といった質問を受けたことがあるはずだ。すると決まって、おおかたの日本人は、日本は日本人の単一民族国家だと答えて不思議に思わない時期が長くあった。少しましな場合でも、日本は単一民族国家に限りなく近い、と胸を張ったものである。もちろん最近では、日本が純粋な単一民族国家でない事実は、政治家の失言、学校教育の成果、周りに外国人が増えたことなどによって、子どもたちでも知るようになった。しかし、具体的に日本の〈多民族性〉とは何を指すのかということになると、はっきりと説明できる人は学校の先生でも必ずしも多くはない。

　私も同じ経験をした。私が長期で住んだ国は、アメリカ、トルコ、エジプトぐらいだが、そのいずれにもかなり無視できない規模か由緒を誇る小数派が住んでおり、民族問題はひと事ではなかった。もちろん、トルコのクルド人のように「山岳トルコ人」といった名称をつけられて公式には存在を否定されてきた人びともいるし、アメリカの先住民たる「アメリカ・インディアン」のように人口数をますます減らしている民族もいる。

　私のささやかな経験でも未知の民族との出会いがいくつかあった。その一つ、私とラズ人とのトルコでの出会いも偶然であった。私が首都アンカラに住んでいた時（一九八四〜八五年）、近くにゆきつけのバッカル（雑貨店）があった。そこでいつも骨惜しみをせずに働く少年がいて、常連の客たちに好かれていた。

　ある日のこと、買物に出掛けると、店がすいていたこともあって、その少年と雑談を交わす羽目になった。すると、少年は親しげに身の上を語り始めて、自分のことをラズ人だと告白したではないか。そう言われてみると、やや雀斑を浮き上がらせて赤みを帯びた白い肌も、どことなくトルコ人よりもカフカース

系の民族を思わせるものがあった。

ラズ人とは、トルコの黒海地方東岸の二つの町パザルからホパにいたる地域に居住する民族であり、人口数も一〇万から一五万とされている。今ではトルコ各地で商業に従事する者が多いが、ラズ語はカフカース諸語の南グループに属する独特な言葉である。ラズ語を発音してくれないかという異国の客の不躾な願いも快く叶えてくれたが、如何せん見当がほとんどおぼつかない言葉であった。トルコの首都でも、ラズのよう小数民族が住んでいることを実地で知って、改めてオスマン帝国以来のトルコ社会の多民族性に驚いたものである。

ところで、日本で土着の最大の小数民族といえば、いうまでもなくアイヌ人であろう。トルコでラズ人に出会ったときも、瞬間的にアイヌ人に連想が及んだのは、私が北海道の出身だったことと無縁ではない。それでも、ラズ人と話を交わした時には、その十年後に、不思議な縁で「ウタリ対策のあり方に関する有識者懇談会」(内閣官房長官の私的懇談会、座長・伊藤正巳東大名誉教授）に委員として参加するとは思いもよらなかった。

つい先頃も、一〇月初旬に二日間ほど内閣内政審議室の肝煎りで現地視察に出掛ける機会があった。白老、静内、平取の三町でアイヌの人びとと直に話を聞く機会をもち、町役場の行政担当者とも接することができたのである。短い滞在ではあったが、私なりに貴重な体験であった。

白老町では人口二万二七七九人のうち二六八八人（一一・六％）がアイヌ人であり、静内町では二万三八三二人のうち二〇三四人（八・四％）がアイヌ人であった。同様に、平取町でも人口六九三八人のうち一六六八人（二二・七％）がアイヌの人びとであった。アイヌ人口については、いずれも平成五年の調査である。どの町でも、二〇人から二五人くらいの町会議員のなかに二、三人のアイヌ

系議員が選ばれており、町役場にも一〇人から二〇人ほどのアイヌ系職員もいるという説明を受けた。

いずれでも驚いたのは、現在シャモ(和人)とウタリ（アイヌ）との間には差別や被差別の関係はないという町役場側の説明であった。確かに、現場の教育努力の甲斐もあって、小学校や中学校では差別が非常に少なくなっていることは信じてもよさそうだった。また、白老の見野町長などは、北海道ウタリ協会からは差別問題で指弾されたこともない、と胸をはっていた。この理由の一つとして考えられるのは、地元に大昭和製紙や旭化成などの産業工場があって、地元の労働力を万遍なく雇用できる機会に恵まれていたことであろう。見野町長もいうように、経済的な吸収が民族間の摩擦を少なくする、というのは正しい。これは、私も従来から主張してきた点と同じであり、民族問題解決に必要な要因の一つといってよいだろう。

しかし、いうまでもないことだが、北海道におけるアイヌと和人との関係は最初から平坦なものではなかった。むしろ、その逆である。最近出された船戸与一の小説『蝦夷地別件』は、和人によるアイヌへの圧迫のひどさから起きた叛乱を描いて評判になった。

ところで、私にとっても、多くの問題と実状を考えるうえで、最近読んだ一冊が和人によるアイヌ人抑圧の苛烈さを改めて確認させることになり、読後が印象的であった。それは、北海道アイヌ協会・北海道ウタリ協会編の『アイヌ史』(活動史編)という書物である。北海道のアイヌ問題を考える上で、この『アイヌ史』ほど有用な書物も少ないのではないか。それは、アイヌ人自身の出した新聞雑誌を再録し、明治以後のアイヌ民族の実態、和人による非道の足跡を包み隠さずに吐露しているからである。たとえば、アイヌ人による和人支配への評価を見てみよう。

> 当時松前氏は本道を統治したとは言へ、夫れは名のみにして事実は蝦夷の労力を借りて漁利を貪る漁場請負人の親分に過ぎず、而も蝦夷人の一切を請負人に一任て顧なかった。然るに元来漁場請負人なるものは営利を本位とする漁業家であるから自然に、人情の赴く処利己主義に走り、彼らを酷使し、搾取し、或は交易品の秤量を胡麻化す等苛斂誅求のあらん限りを尽した。剰へ請負人と言っても請負主自ら現場に来る訳でなく、内地で食ひ詰めた、ならず者の果てが、蝦夷地に流込んで漁場の手代や支配に当るのだからたまらない。情け容赦などは薬にしたくもなかった。以て蝦夷人の苦役を想ふべしだ

これは、一九三一（昭和六）年の吉田菊太郎（北海道アイヌ協会主幹）の発言である。漁場請負制度という名のアイヌ支配方式もさることながら、松前藩と和人による植民地主義の性格をよく言い当てているといえよう。この文章は、北海道アイヌ協会の機関誌「蝦夷の光」第三号（昭和六年）に寄せられた。こうした貴重な資料が身近になったのは、北海道ウタリ協会はじめ、志の篤い九人の学者たちが浩瀚な「アイヌ史」を編集して、先人の文書の散逸を防いだからである。一四三六ページにもなる大部の書物「アイヌ史」には、『蝦夷の光』だけでなく、その後の『北の光』や「先駆者の集い」に加えて、現在のウタリ協会に関係する資料も丁寧に収められている。

惜しむらくは、『蝦夷の光』は四号で廃刊になってしまった。戦後になってようやく「北の光」の名で機関誌が再刊されているので号数が少ない。しかも、これもどうしたことか、一九四六（昭和二一）年の創刊号のみを発行して短命に終わっている。俗に謂う〈三号雑誌〉のように、微光のように点滅して消え去ったのである。

結局のところ、北海道ウタリ協会が『先駆者の集い』として、新たに機関誌を出すには、一九六三（昭和三八）年まで待たなくてはならない。この第二号は、昭和四六年に出されており、創刊号との間に長い空白が横たわっているのも不思議議である。何かの深刻な事情があったのかもしれない。しかし、これらの背後にひそむ事情をつまびらかにしない。推測できるのは、アイヌの人びとのアイデンティティや権利回復に向けた事業がいかに困難であり、複雑な経緯を伴うものだったかということである。周囲の私たちがいたずらにあげつらうべきでないかもしれない。

『先駆者の集い』などを読んでも、ウタリ協会の名称変更や活動の再編成や機関誌の休刊再刊などの理由については、必ずしもよく伝わってこない。内部の意見の不一致、活動方針などをめぐる対立などがあっかのかもしれない。そうだとしても、機関誌には、吉田菊太郎のようなアイヌの肉声と内部からの歴史証言に満ちあふれている。多くの点で、アイヌ史だけではなく、北方史に多くの光をあててくれることは変わりない。読者のなかには、おそらくかなりの方が関心を抱かれるだろうから、この本の問い合わせ先についても一言しておこう。さしあたり、060札幌市中央区北二条西七丁目北海道ウタリ協会、電話〇一一—二二一—〇四六二に連絡すれば懇切に対応してくれるだろう。

さて、『アイヌ史』に見える記事を戦前から現在まで通して眺めると、アイヌの運動や考えの変化と発展が自ずから浮かび上がってくる。編者のひとり田端宏氏の解説を私なりに整理するなら、その流れを四つに大別して考えられる。

第一に、個人的修養の強調から、アイヌの生活条件の改善を求める運動へ。

第二に、「和人」への「同化」を目標にする考え方から、アイヌ民族としての自立と自覚を重視する運動へ。

第三に、旧土人保護法廃止論や改正論の検討から、民族としての自立を保障するための立法措置、アイヌ新法制定の運動へ。

第四に、世界の先住民族と連帯しながら、国連の各機関で発言、問題提起を重ねていくような活動の国際化へ。

ところで、一九九三年の国際先住民族年の制定を機会に、世界中に約三億人(国連推計)いる先住民族の権利についてしきりに議論が交わされている。日本でも、昨年の夏も含めて世界の先住民代表を招く集会がこのところよく開かれている。世界の先住民族としては、北極圏のイヌイット(エスキモー)、北米のアメリカンインディアンまたはネイティヴ・アメリカン(インディアン)、中南米のインディヘナ(インディオ)、オーストラリアのアボリジニ、北欧北部のサーミ(ラップ)、ニュージーランドのマオリなどが知られている。

先だって接したアイヌの人びとも、文化を中心に各国の先住民族との交流を今後ますます深めていきたい、と語っていた。

二十一世紀の民族と文化の共存を考えるうえで、国家や地域内部の先住民族の存在を無視することはできない。これは、日本が「純粋な単一民族国家」であるという考えを自ら否定するうえでも重要である。日本国民と日本人とは重なりもあるが、ズレもあった。国籍法第一条などは、日本国民たる要件が「日本の国籍」を有することにあると教えてくれるが、「日本人」とは何かというアイデンティティについては答えてくれない。アイヌ民族の歴史は、〈日本人とは何か〉という問いにも答えを与えてくれるに違いない。また、それをラズ人とも比較するなら、〈トルコ人とは何か〉という設問への答えにも近づくことになるだろう。アイヌ民族の問題は、日本だけでなく、世界の〈民族問題〉を考える上でも貴重なことを忘れてはならない。

私が参加している懇談会にも、まもなく報告と答申の季節が近づく。

京都一千年の歴史に
育まれた巧みの技
京仏壇・佛具は当店に!!

〒六一五 京都市右京区
西京極南衣手町七四
(株)島津法衣佛具店
☎〇七五―三一四―七七六八
FAX〇七五―三一五―三七五三

山内昌之
やまうちまさゆき

1947年札幌に生まれる。1971年北海道大学文学部卒。カイロ大学客員助教授、東京大学助教授。トルコ歴史協会研究員、ハーバード大学客員研究員などを経て、現在、東京大学教養学部教授・学術博士、主要著書『現代のイスラム』(朝日新聞社、1983)『オスマン帝国とエジプト』(東京大学出版会、1984)『スルタンガリエフの夢』(東京大学出版会、1986)『神軍 緑軍 赤軍』(筑摩書房、1986)『瀕死のリヴァイアサン』(TBSブリタニカ、1990)『ラディカル・ヒストリー』(中央公論社、1991)『ソ連・中東の民族問題』(日本経済新聞社、1991)『The Green Crescent under the Red Star』(Tokyo:ILCAA, 1992)『イスラムのペレストロイカ』(中央公論社、1992)『民族と国家』(岩波書店、1993)『世紀末のモザイク』(毎日新聞社、1994)『Hosnul Olamamis Adam:Enver Ppasa の ― türkiye'den Türkistana』(Istanbul:Baglam Yayincilik, 1995) など。

子年(ねどし)史談

細田隆善

子の古字
子供が手を動かしているを現す

鼠の古字
頭は歯、胴は足と爪、尾を現す

子年

平成八年は西紀一九九六年、仏暦二五三九年、浄土開宗八二二年にあたり、大正以来八十五年、昭和以来七十一年になります。また干支(えと)の上から丙子(ひのえね)になりますので、子(ね)の年、鼠の年といいます。鼠は多産系の動物、大黒天の神使とされることから、豊かな年、経済豊かな年として期待されています。

時間の上から子(ね)の刻は、午前零時をさし、午後十一時から午前一時までの二時間をいいます。また方角の上から北をいいます。

中国の甲骨文に十二支があり三千年前から使用され、十二支は正倉院の御物(ぎょぶつ)に取材されていて、暦、時刻、方角などに使用されていました。

子を「ね」と読むのは十二支だけであり、子を「ねずみ」と読むのは無理、子の文字は幼児が手を動かしている形から出来た象形文字に由来し「生み、ふやす、育てる」の意味を現すことから、十二支の最初の鼠にあてたものです。

鼠が十二支の一

十二支にはそれぞれ動物が配してあるが、鼠がその一位になったのはつぎの伝承からです。年の暮れに神が元旦の朝、新年の挨拶に来るよう動物たちに申し渡しました。一番早く来たものから十二番目までは順序によって一年ずつ動物の大将にするとのこと。猫は神のところへ行く日を忘れてしまい、鼠に聞きました。鼠はわざと一日遅れの間違った日を教えました。牛は歩くのが遅いからほかのものより早く出発しようとして、前日暗いうちに出かけました。そのことを知った鼠は牛の出発寸前、牛の背に飛び乗ってしまいました。それを知らない牛は社前に着くとまだだれも来ていない。門があくと鼠は牛の背中から飛

び降り、かけつけ一番となりました。牛は二番目になってしまいました。そのあとから虎、兎、竜、蛇、馬、羊、猿、鶏、犬、猪の順に勝負がきまりました。しかし猫は一日遅れたために入れなくなったのです。このため猫は鼠をうらみ、鼠を追いかけるようになったといわれています。

鼠

鼠は齧歯目の哺乳動物、南極とニュージーランドを除いて全世界に分布し、種類も多い。ハツカネズミ、クマネズミ、ドブネズミが代表的であるが、東京にはエジプトネズミが多く、三千万匹といわれています。

ネズミ類は暁新世（六千万年前）北アメリカに出現し、しだいに世界に広まり、第四紀（百七十万年前）に爆発的に増加進化して現在に至っています。

家ネズミは人と生活し、古代の高床倉庫の柱のネズミ除けは登呂遺跡から発見されています。鼠の害には先住民族時代から困惑していたことがよくわかります。

白鼠

白鼠は古来珍らしいもの、めでたいものとされ、また福の神の大黒天の神使として、商売繁盛の民間信仰を高め、よく働く人を白鼠とも称しました。続日本紀によると白鼠が四回献上されています。

神亀三年（七二六）正月
神護景雲二年（七六八）十一月
宝亀九年（七七九）九月
延暦九年（七九〇）九月

また日本後紀にも献上された記録があります。

大同四年（八〇九）三月

文徳実録に献上記録。

仁寿二年（八五二）二月

また扶桑略記に。

寛平九年（八九七）十一月

古事記鼠の話

須佐能男命が野に鳴鏑の矢を放ち、大国主命にその矢を探してくれと命じました。大国主命が野に入ると、野に火を放って草を焼きました。そのとき鼠が炎に囲まれた大国主命を地下の洞穴の中へ導いて命を助けました。鼠はその矢を探し出し命に差し出しました。この縁起によって鼠が大国主命の神使となりました。

　のち仏教の大黒天と大国主命が、大黒と大国が同音であることから習合し、鼠は大黒天神使となりました。

　仏教美術には鼠の縁りのものは少なく、薬師如来十二神将の毘羯羅大将は子の神として頭上に鼠を載せています。子年生れの人の生涯の守り本尊は千手観世音菩薩です。当菩薩は奈良時代広く信仰され、奈良の唐招提寺、東大寺、興福寺のこの菩薩は国宝として現存しています。

鼠と文芸

　万葉集、古今集、新古今集には鼠を詠じた歌はありません。当時鼠がいなかったわけではありませんが、鼠や鴉は歌の素材になるものでないとされていたからです。

　しかし夫木和歌集には土御門院の御製をはじめ数首が登載されています。

◎世をしのぶ心のうちのあなねずみやすくいづべき道もあるらん　土御門院

◎ふゆかれの草葉にさわく日のねずみ昨日は今日になるぞ程なき　同

◎君にかくよめのことたに志らるれはこの小鼠のつみかろきかな　和泉式部

◎よめの子の小鼠いかゝなりぬらんうつくしと思ほゆるかな　法性寺入道関白

子年生れの生涯守り本尊
十一面観音菩薩
（唐招提寺・国宝）

◎いかにせんかゝれる草の露のよを月のねずみはねにさわくなり　花園左大臣家小大進
◎のとけがれ月のねすみよ露の身をやとす草葉のほともなき世に　清輔朝臣
◎わかなむ草のねをはむねすみそと思へば月のうらめしきかな　俊頼朝臣
◎後の世にみたのり志やうをかかふらすはあなあさきしの月の鼠や　後京極摂政

鼠を「月の鼠」と表現したところに当時小動物に対しても美を観察したことが偲ばれる。

俳句は生活の詩であるから鼠に取材した句は多く、正月三が日に鼠が出ることはめでたいこととされ「嫁が君」と鼠をいって俳句の季題になっています。

◎餅花やかざしにさせる嫁が君　芭蕉

延宝年間（一六七三―）の作。

◎氷苦(にが)く偃鼠(えそ)が咽(のど)をうるほせり　芭蕉

天和二年（一六八二）の作、偃鼠はドブネズミであるが芭蕉自身のこと。

◎雀子と声鳴きかはす鼠の巣　芭蕉

この句は年次不詳。

◎花にねぬ此もたぐいか鼠の巣　芭蕉

元禄五年（一六九二）の作。

◎子(ね)の日しに都へ行かん友もがな　芭蕉

貞享二年（一六八五）の作、子の日が正月の季題、正月初の子の日に小松引きの行事を行なったのです。昔は甲子(きのえね)の日に子待講(ねまちこう)、甲子講が催され、大黒天を祭り福徳円満、五穀豊穣を祈り、飲み食い歓談し、ところによっては一夜を明しました。「甲子」と文字を刻んだ石塔が各地に残っているのは、講中の人たちが建てたものです。

鼠浄土

「おむすびころりん」「鼠の餅つき」という昔話があります。善良な爺が取り落とした団子、握り飯、焼餅を追いかけていくと穴に落ちてしまいました。そこは地中の鼠の浄土、

歌をうたい、餅をついている。爺は歓待をうけ、土産に餅、金銀、宝石までもらいました。それをうらやんだ婆がわざと団子などを転がして、鼠の浄土へ行き、歌をうたっている鼠たちに猫の鳴き声を真似して驚かしました。するとすべてが消え去り、婆は何一つも得られず地中に埋れた話、「団子浄土」の話ともいわれています。

鼠塚

鼠供養のために建てられた鼠塚が一基あります。臨済宗大徳寺派の祥雲寺（渋谷区広尾五―一）の基地に高さ三メートルの巨大な碑石の鼠塚です。明治三十五年四月、明治屋ほか十一人によって建立され、つぎの歌が記入されてあります。

数知れぬねずみもさぞなうかむらん
この石塚のおもきめぐみに

鼠小僧次郎吉

鼠小僧次郎吉は江戸末期の盗賊、江戸堺町（中央区人形町）に住み、鳶人足であったが、博徒となり、文政三年（一八二〇）から武家屋敷に侵入し、小穴から出没し、身軽なことから鼠小僧と称されました。天保三年（一八三二）四月、浜町の松平宮内小輔の屋敷に忍びこんだところ捕えられ、八月鈴ケ森で獄門の刑に処せられました。盗み九百回、盗んだ金は三千両以上、主に武家屋敷を荒し、市民には金を与え義賊と呼ばれていました。墓は両国の回向院にありますが、墓石を欠かして持ち帰ると勝負ごとに運がよいといわれて、墓石を欠かされるので、近年は側にこすり墓が造られてあります。鼠小僧は講談、演劇などに取材されております。

（深川勢至院長臘・俳号豊明）

鼠塚
（港区祥雲寺）

鼠小僧次郎吉の墓
（墨田区回向院）

COLUMN

若和尚の

チョットいいはなし 其十

明けましておめでとうございます。このお正月、過ごし方は皆さんそれぞれに違うこととは思いますが、今年も、あるいは今年こそはよりよい一年であるよう願っている気持ちはきっと同じでしょう。

さてさて、皆さんはご自身の宝物と言えるものを持っていますか。それは何か教えて下さい、とは申しませんが、一寸考えてみて下さい。もちろん人によって違いがあるでしょうが、全ての人が皆共通に持っている宝物があるというのです。

大乗経典の中にも殊に有名な「法華経」。この中に次のような喩えばなしが説かれています。

親しくしていた友達が自分の知らないうちに、着物の懐にそれはそれは高価な宝物を縫いつけていてくれていたのに、そのことにずっと気づかず、とても貧しい生活を続けている、というものです。

おわかりですね。このおはなしは、人間は誰にでも測り知れない価値、可能性を具えているのに、自分ではなかなかそのことに気づかないものである、ということを説き示しています。

目の前にあるピカピカとしたものに心を奪われるのは誰でも同じです。そして「これこそが私の宝物である」と錯覚しがちであるのもまた確かです。そういった、一見、宝物であると思いがちのものに巡り会う機縁というものは人によってまちまちでしょうし、果たしてそれが本当に本当の宝物といえるのかどうかもはっきりはしませんが、仏さまは人として生きていく上での大きな価値、可能性という宝物を、誰れ彼れの区別無く平等に与えて下さっているのです。

たとえ今は原石であっても、私たちはダイアモンドを授けていただいているのです。せっかくの宝物です。一刻も早くこのことに気づいて、磨いて磨いて磨き抜き、ピッカピカにしましょうよ。まだこの研磨作業に取りかかっていない人、そろそろ懐から取り出して今年あたりから磨き始めてみてはいかがでしょうか。宝の持ち腐れにするなんて、そんなもったいないことはありませんものね。

(正)

COLUMN

世の習い

先月号で御所野洋幸さんの一年におよぶ連載が終わった。ブナ林の四季折々の表情を、写真と文で紹介いただいた上に、本誌の表紙まで飾っていただいた。微力ながらお手伝いさせていただいた者として、誌上から失礼ながら、お礼を申し上げます。ありがとうございました。

さて、この連載中に記事以外で大変印象的だったことがある。

ブナ林にご案内いただいたこと、御所野さんの馴染みの居酒屋へ連れて行っていただいたことの二つである。

ブナの木が林立する大自然の中で岩魚と戯れ、来年の再訪を密かに誓える満足を味わったし、その秋田の山奥に開発の手がゆっくりながらも確実に伸びていて、日本の行政の実態を見ることもできた。

もうひとつ、御所野さん馴染みの居酒屋は、新宿にあり、頑固なおやじさん、日本全国の日本酒、珍味もあるイケル肴、と通好みの三種の神器が揃っている。だが、印象的だったのはお店ではない。御所野さんの多芸多才にである。

すでに秋田の山中で一献傾けたことはあるのだが、自然に抱かれた中では俗な話にはなりにくい。それが新宿となれば、郷に従い必然と俗な話となる。同席いただいたデザイナーと三人で大いに呑み、語り、笑ったのだが、とにかく御所野さんの多芸多才は筆舌に尽くせない。秋田から東京に出て来て以来、どんな日々を送られて来たのか……、とにかくこんなに楽しいお酒は初めてだった。

浄土宗の宗祖法然上人は、酒は世の習いとして飲むのなら、とおっしゃっている。お酒を通してその人柄にも触れられるのだから、たまには飲むことも悪くない。最後になったが、再度、御所野さんに多謝。（洋）

秋田のブナ林を撮る
御所野洋幸氏

平成八年　謹賀新年

総本山知恩院門跡第八十六世
浄土門主
中村康隆

大本山　増上寺
法主
藤堂恭俊

大本山　金戒光明寺
法主
坪井俊映

大本山　百萬遍知恩寺
法主
大野忍敬

大本山　清浄華院
法主
江藤澄賢

大本山　善導寺
法主
藤堂俊章

大本山　光明寺
法主
戸松啓真

大本山　善光寺大本願
法主
一條智光

法然上人御降誕地廿五霊場第一番
中国三十三観音特別霊場
誕生寺
〒709-36　岡山県久米郡久米南町里方八〇八
電話（〇八六七二）八―二一〇二

大正大学
理事長
太田秀三

埼玉工業大学
松川文豪

学校法人　大乗淑徳学園
淑徳大学・淑徳短期大学
理事長
長谷川良昭
〒174　東京都板橋区前野町五―五―一

平成八年　謹賀新年

京都文教短期大学
学長　**大河内良孝**
〒611　宇治市槙島町千足八〇
電話(〇七七四)二一—四一〇一

浄土宗宗務総長
成田有恒
〒154　世田谷区世田谷四—七—九
大吉寺

函館　**称名寺**
〒040　函館市船見町十八—十四
電話〇一三八(二三)〇五七四

愚鈍院
住職　**中村眞道**
〒984　仙台市若林区新寺三—十二—七
電話(〇二二)二五六—六〇五七

雲上寺住職
東海林良雲
〒995　塩釜市南町十一—一

お寺は生きているうちに行くところ
ナムアミダブツのお寺
住職　**樋口隆信**
副住職　**樋口伸生**
〒986　宮城県石巻市門脇町二—五—七　西光寺
電話(〇二二五)二二—一二六四

勝願寺
〒365　鴻巣市本町八—二—三十一
藤田得三
電話〇四八五—四一—〇二二七

大松寺
酒井亮貫
〒106　東京都港区三田四—一—三八
電話(〇三)四五一—二四九四

芝学園理事長
大正大学同窓会長
真野龍海

浄土宗東京教区教区長
光取寺
住職　**大室了晧**
〒141　東京都品川区大峰一—五—十
電話〇三(三四四一)—八三八四

西念寺
住職　**西島義彦**
〒160　新宿区若葉二—九
電話三三五一—〇六六二

浄土宗梅窓院
住職　**中島真成**
〒107　東京都港区南青山二—二六—三八
電話〇三(三四〇四)—八四四七

平成八年 謹賀新年

〒112 東京都文京区小石川三丁目十四番六号
無量山
傳通院
電話(〇三)三八一四―三七〇一(代表)
振替東京六〇九三番

光円寺住職
佐藤良純
〒112 文京区小石川四―十二―八

お寺は皆さんの相談所
浄心寺
小池政雄
〒113 文京区向丘二―十七―四

法性寺
長臘 **広本徹隆**
〒135 江東区三好一―二―八
電話 三六四一―一三五六

明顕山 祐天寺
住職 **本多正雄**
副住職 **巌谷勝正**
〒153 東京都目黒区中目黒五―二四―五三
電話(〇三)三七一二―〇八一九

教安寺住職
大本山増上寺執事長
住職 **野呂幸進**
〒210 川崎市小川町六―二

横浜大光院
宮林昭彦

鎌倉大仏殿 高徳院
住職 **佐藤密雄**
〒248 鎌倉市長谷四―二―二八
電話(〇四六七)二二―〇七〇三
FAX(〇四六七)二二―五〇五一

正観寺住職
宮沢善弘
横須賀市浦郷町二―七九

晴雲寺住職
塚田弘導
〒254 平塚市立野町六―一五
電話 〇四六三(三二)一六三八

貞松院住職
山田和雄
〒392 諏訪市諏訪二―十六―二

お骨佛の寺 一心寺
貫首 **高口恭行**
〒543 大阪市天王寺区逢阪二―八―六九
電話(〇六)七七一―〇四四四(代)

FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では読者の自由な参加をお待ちしています。
詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、
TVウォッチング、紀行文その他創作等。
あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

小江戸吟行

百句会川越吟行　蓮馨寺句会報告

旧暦十月。異称、神無月。

出雲のことはいざ知らず、すなわち「神の留守」をこれ幸いにというほどの度胸も、異類めく大それた考えもないが、十一月の最後の土曜日、川越に吟行することになった。

小江戸、川越。

掛値なしに、古き佳き街である。

池袋待ち合わせ組と川越駅直行組が合流。

一行十人。いやベビーカーで参加の一歳児莞爾君を加えて十一人。

東武線の駅から喜多院へ歩く道筋、長老斉田仁の立木、野草の講義がいつもながら楽しい。もちろん俳句に親しむくらいだから、若い連中もなかなかに詳しいが、異論百出すると「仁さんに聞こう」ということになる。

私などはまるっきり。柿の実がなっているから柿の木だとわかる程度だから、一同の博識ぶりにただただ感心。戦後のラジオで確かサトウハチロー原作のドラマがあったが、その「何でも知ってるジロリンタン」というテーマソングをひとりなぜか口ずさんでいた。

茶蕎麦、蒲焼、芋の天麩羅といったいかにも御当地系の昼食をとり、風情ある街並をそぞろ歩く。晴天に恵まれた週末、人出は相当なもので此処はもうすっかり観光地になったのだ、と実感した。

句会の席は蓮馨寺さんの御好意により座敷をひとつ貸して戴いた。

川越蓮馨寺といえば、浄土宗関東十八檀林のひとつ。伽藍は威風蒼然、庭には冴え冴えとした竹林が見えてまことに情趣溢れる会場となった。快く承諾して下さったこの名刹の久米原恒久御住職ならびに大奥様にはここで改めて厚く御礼を申し上げたい。

題「黄落」

黄落や闇すこしある庫裡の瓶（かめ）　**仁**

「こうらく」と読む。文字通り木の葉または果実が黄ばんで落ちること。日葡辞書に「サウモククワウラク」とある。余談だが日葡辞

書とは慶長八年に日本イエズス会が刊行した日本ポルトガル辞典のこと。文例をあげ、当時の標準語である京都語と九州方言との差異に留意し、歌語・文語などを注するという懇切丁寧本格的なものでこれを当時のバテレンウルマン達が作ったのだから凄い。

ま、それはさておき「黄落」はそのままで強い季節感を持つ言葉、季語としては紛れもないが、まず普段使わない。馴染みがない。そのうえ百句会の題詠では季語をそのまま題に出すのは原則的に認めていないということもあって「作りにくい」との声も多かった。

こういう難場を凌ぐのはやはり手錬の斉田仁。点こそ僅差だったが、内容でははっきりと差をつけて文句なしの佳句。

迷い犬ひたひたひたと黄落す　裕
黄落を飲みほさんとす盃一杯　吾郎
黄落や大陸へつづく帯となれ　十四郎
いまはきみのかたちに揺れていよ黄落　哲郎
不倫あり黄落極むバッキンガム　亞子
黄落の寺「おろうそく五十円」　啞々砂
浄土宗に地獄がありき町黄落　等
黄落や小江戸の猫も谷下る　しおり
廃屋の黄落ありて酒温し　菊野

題「百」

からっ風五百羅漢の鼻削る　啞々砂
百回忌慈のようなる僧に会う　哲郎

出ました。百句会名物。ただ人を困らせる「ために出す」題。前回は斉田仁が「二」という題を出し「ええっ？」と思ったら続いて「3」と表書きされた封筒が回ってきたので一同憤然、作り分けるのに七転八倒の思いをした。出した当人はニヤニヤ。人の悪い最年長というのはどうも困りものだ。

近藤啞々砂の句は「鼻削る」がいい。言えそうでいて、なかなかこう大胆に言えない。

俳句を始めてまだ一年、しかも、いつも乳幼児（莞爾）を連れての参加で、なかなか集中し難いだろうに健闘が光る。次点の句は一体何を詠んだものか理屈も実態も浮かびにくいが、「何か変だ」というだけで点を稼いだいわば卑怯な句である。

ところで、この句会のルール説明をするが、いわゆる題詠、とりあえず袋回しと呼んでいるが、ひとり一題を封筒に表書きし、それを使った一句を作り、封に入れて右隣に回す。

回ってきたら、何が何でもそれを使って俳句を作って入れるまで隣に回せない。過酷な即興性を持ったルールだが、これが刺激的で面白くてやめられないという人達がいるから世の中油断がならない。

百ほどの煩悩持ちて紅葉見る　仁
江戸バビロン百代の涯てのバス通り　十四郎
百枚の切手が消えて冬の海　等
何ゆえに百物語冬の夜　吾郎
冬夕焼百円菓子に名品あり　亞子
百鬼夜行の一人となって日記買う　菊野
百人に聞きました兎は季語か？　亞子
厳冬が来る百万本の芋を焼く　裕

今回も百番目なり冬句会　しおり

題「酒」

酒瓶を包む薄紙冬浅し　裕

「酒」は前の二題と違った意味で、かえって難しい題である。あまりにも身近にあって年中使っている言葉。しかも古今の秀句、類句がいっぱいありそうな気がする。そういう意味でか多く不出来の句が出て押し出されるようなトップは長谷川裕。「酒瓶」「包む」という発想の妙で一枚抜け出した。文句をいえば「薄紙」と「冬浅し」のイメージが重複してしまうところだが、しかし、それもうまく初冬の空気の軽さを表現しているようにも思えて、案外良いところになっているのか。

　どちらにしてもこの作者の場合、計算づくの狙いの処だろうから、褒めても貶しても結局北叟笑まれるのが癪だ。

天井のしみを数えて玉子酒　菊野

酒瓶が書棚にありき冬の海　等

寝酒していつも指紋のような夜　哲郎

酒枕厳冬山河を漕ぎ渡る　十四郎

定住漂泊酒場のとまり木にとまる　仁

着ぶくれて酒飲みにして団子好き　亞子

冬の夜甘く赤い酒に酔ひ　啞々砂

玉子酒つまみはないかと鼻すする　しおり

吟醸もぬる燗で利く雪見酒　吾郎

題「羅漢」

霜羅漢頭の上の一円貨　十四郎

　喜多院の五百羅漢を見てきたばかりだから誰かが出すと予想していた。なのに意外に難しい。点を集めた近藤十四郎の句。「霜」の冠が効いている。本職はグラフィック・デザイナーで「浄土」のレイアウトもお願いしているが、毎月、吉祥寺「曼陀羅」でライブを開くミュージシャンでもある。当人の最近の口癖を借りていえば「侮れない」男だ。

くっきりと冬だ羅漢達相笑う　菊野

黄落や昨日のままの羅漢像　裕

陌羅漢かも知れず初冬の陽にまみれ　仁

群衆と羅漢ごちゃごちゃ冬ぬくし　等

日向ぼこ羅漢の中に似た寝顔　吾郎

ふり向けば羅漢五百のくしゃみかな　哲郎

甘酒やとなりで羅漢も踊り出す　しおり

短日や羅漢の前の一円玉　亞子

寒空に五百羅漢の声消えて　啞々砂

題「散る」

紅葉かつ散る寺町の写真館　仁

鼻ほじる羅漢もおりて紅葉散る　菊野

散る紅葉びんずる様が座している　等

木の葉散る羅漢の小道づかづかと　啞々砂

木の葉散る光の表裏蓮馨寺　哲郎

　「動詞」の題もまた趣向である。結構こなしたというべきか、多く点が散った。仁さんの一句はとりわけて秀逸というべき。最後の句は会場への「挨拶句」ということで恩情の点が入ったらしい。

青空にはらはらはらと紅葉散る　吾郎

甘酒の香ともみじ満ち人が散る　十四郎
名物は発狂せんべい銀杏散る　亞子
達磨忌の割れて砕けて散るざくろ　裕
大風邪や末期の灰も散り散りに　しおり

題「ミーハー」

ミーハーと結球しない冬キャベツ　裕
ミーハーは母親ゆずりおでん食う　亜子

上手い作家にも好不調の波がある。この日の笠井亞子がそういう感じだった。いつも高得点を取りまくる「よく見れば美人の亞子さん」のファンのひとりとして少し心配になった。けれど不調とはいえ、水準は高い。こんなふざけたような題をきちんと句にするあたり、どうしてどうして並みのうら若き女流俳人ではない。

ところで「結球」という言葉、句会が始まってから誰かが説明してくれた言葉で「ふーん、それを結球というのか」とやたらに感心していたのが裕。いま覚えたばかりの言葉を使って一句ものにしてしまうあたり、毎度のこととはいえ天をも恐れぬ所業である。

ミーハーに随きて寒風寺の中　菊野
ミーハーの生命力や冬景色　十四郎
ミーハーの襟の刺繍に冬霧来　等
ミーハー日本沖縄冬の海とりまく　仁
あの子待つミーハー娘のかじかむ手　しおり
ミーハーに徹して誘う酉の市　哲郎
テレビ局出待ちのミーハーマスクあり　吾郎
菓子屋横町ミーハーに鯛焼買い食いす　啞々砂

題「芋」

暖冬や髭根を残す芋の肌　裕

僅差で大畑等の句。裕、等の句に妙に気合が入っている気配。これには理由があって、前回西念寺句会において、はじめて「逆選」というルールを採用した。選句のときに良いと思った句を正選つまり○、これは嫌だと思った句に逆選、つまり×をつけるルールである。元来、天才肌（言い過ぎか）の人間は気に入った題だと、素晴らしい水準の句を作るが逆に気の乗らない題だといい加減にポーンと放り出すところがある。裕、等は「これはいいな」という句を作ったときは断然他を寄せつけず点を集めるが、そうでないときには「これでもか」というほど逆選の集中砲火を浴びる。今回は逆選を採用しなかったが、前回よほど懲りたらしい。手を抜かない。

芋煮えてラジオが伝う円相場　等
戦中の芋ぼうぼうと風が吹き　仁
レトリックは似合わない川越の芋　菊野
冬麗ら小江戸の旅の芋づくし　しおり
有機学めぐりて通る尻の穴　十四郎
襖ごしながむ小庭や芋疲れ　亞子
雨音に焼芋売りの声寂し　吾郎
芋菓子を買い集めきて冬の寺　啞々砂
芋粥の湯気のむこうに揺れる橋　哲郎

これから先は、斉田仁の独壇場。もともと別格の人だから仕方がないのだ。句のみ眺め

て戴くことになる。
いままで本文中で触れられなかった出席者について少し。ひとりは秋谷菊野。季語のような、それも季重なりの御名前だが本名。私たちとは初対面で少し遠慮なさったのか、得点がいまいち伸びなかった。選句においては力を出され、私の拙句に随分と点を入れておられたところは鑑賞力に並々ならぬものあり(?)と拝察した。「麦」所属。
残る二人は井口吾郎、井口しおりの御夫婦で、今回、句会は二度目。はじめて俳句に出会い俳句の魅力に取り憑かれそうな気配。何でもこの時期が一番面白い。手探り状態だがもう少しで何か掴んでくれるに違いない。
(文中敬称略・文責/本誌佐山哲郎)

題「発狂」

櫨紅葉発狂寸前かも知れず　仁
万両や発狂の空の碧さかな　十四郎
湯婆(ゆたんぽ)が発狂しつつ噛んでくる　哲郎
冬霞ざくろもついに発狂す　しおり
冬晴れや発狂男歯白く　啞々砂
鼻かんで冬夕焼が発狂す　等
柿落葉多忙なゆえに発狂せず　菊野
殿様が発狂してのち紅葉山　裕
発狂やアイドルは冬の虹のごと　亞子
〆切に発狂真近年の暮　吾郎

題「どろぼう」

どろぼうも風も容れたる寺の秋　仁
どろぼう橋の由来紅葉がまぶしくて　等
悪党になれずどろぼう紅葉焼く　菊野
どろぼうと叫べこの寒風の中　しおり
燦々とどろぼう橋を渡る冬　裕
川越の大根どろぼう左利き　亞子
どろぼうもどろぼうなりのクリスマス　吾郎
どろぼうの師走の義侠人知らず　十四郎
泥鰌掘るどろぼう長屋安息日　哲郎
朽葉の川どろぼう橋は朽ちもせで　啞々砂

題「アイロン」

火を入れぬアイロンの銀冬来る　仁
冬麗らアイロンごろり店先に　啞々砂
無口なるアイロン台や冬の雨　亞子
アイロンに余熱まだあり鳥渡る　等
アイロンも輪郭優し冬日和　哲郎
アイロンで皺取り切れぬ今朝の冬　裕
アイロンが人肌に冷める冬の縁　吾郎
アイロンをかけぬ人増え冬木立　菊野
アイロンをあてて束の間の暖をとり　しおり
アイロンを凶器と見立て鉄冴える　十四郎

冬　誌上投句会

冬の月十方世界闇を消し
山あいのたつきの煙り冬景色
児玉良男（静岡）

初写経筆のいのち毛一すじに
掬ぶ掌に光り満ち充つ初清水
良誉一慧（埼玉）

初日まつ渚に近き露天風呂
若返るボルサリーノの冬帽子
児玉仁良（埼玉）

●J・FORUM（浄土フォーラム）

ご好評を頂いております、皆様のためのコーナー〈J・FORUM〉。毎月、投句、投稿を頂いておりますが、編集部ではもっともっとたくさんの作品を、お待ちしております。短歌や俳句、書評随筆や詩、身近な出来事や情報など、先の要領でどんどんご応募ください。私たち編集部では、読書の皆さんと一緒に、この「浄土」をより楽しく、すばらしいものにしていきたいと考えております。

1随筆・歌など…四百字詰め原稿用紙十枚以内
2俳句・短歌・川柳など…二首まで
3その他、本誌の体裁や掲載記事に対するご意見やご感想など、何なりと気軽にお聞かせ下さい。
…適宜

タイトルは自由です。投稿は随時受け付けておりますが、採否に関しては編集部にご一任下さい。また。原稿は返却いたしませんので必ずコピーをおとりの上お送り下さい。採用分については記念品を進呈いたします。

●読者アンケートのお願い

編集部では「浄土」のより一層の充実を図るために、皆様にアンケートをお願いしております。

1十一月号でもっともよかった記事。
2今後、掲載してもらいたい記事、希望する内容。
3法然上人鑽仰会の活動として望むこと。
4その他。ご意見、ご感想など。官製はがきまたはFAXで事務局までお送り下さい。もれなく記念品を差し上げます。どうぞご協力お願いします。

（住所、氏名、電話番号をお忘れなく）

●新規会員紹介（敬称略、順不同）

〈購読会員〉

＊宮　城　石　巻　武藤浩光
＊東　京　八王子　延 立 寺
＊東　京　世田谷　八木一子

〈お詫びと訂正〉十一月号 新規会員紹で、山梨東八代郡西蓮寺は、西運寺の誤りでした、訂正しお詫びいたします。

●会費ご請求のお知らせ

まだ、平成7年度会費をお納め頂いてない方は、お早めにご送金下さいますようお願い致します。

郵便振替
口座名　法然上人鑽仰会
番　号　〇〇一八〇―八―八二一八七

●バックナンバーのご案内

一昨年四月号以降のバックナンバーがございます。ご希望の方、また掲載内容をお知りになりたい方お問い合わせ下さい。なお、一九九四年二、五、十一月号は残部僅少につき、お分けすることができませんので、あらかじめご了承下さい。

●お詫びと訂正

●本誌十二月号「法然上人と私」茅野秀夫氏の文中、たくさんの誤植がございました。
ここに正誤表を掲載し、お詫びと致します。

18ページ5行目　意義→意識
11行目・12行目　風向→風光
16行目　静止→生死
19ページ9行目　あると→あるに
16行目　それ自信→それ自身
20ページ10行目　全体他力→絶対他力
21ページ13行目　理論的→論理的
22ページ3行目　生きます→行きます
〃　自我の意義→自我の意識
11行目　この方法を法然→「法然
23ページ7行目　そし世界→そして世界

また、特集阪神の記事中の49ページ、並びに目次の平尾弘泉さんは平尾弘衆さんの誤りでした。ここに訂正させていただきます。また平尾弘衆さんに多大なご迷惑をおかけしたことを、お詫びいたします。

アンケート、お問い合せ、投稿は……
法然上人鑽仰会
〒一〇五　東京都港区芝公園四―七―四
明照会館内
TEL　〇三―三五七八―六九四七
FAX　〇三―三五七八―七〇三六

編集 後記

厳寒に春来たりとはおもしろし　岱潤

太陽暦がすっかり定着した現在も、「迎春」という言葉はどうもおこがましくて使う気になれません。これからいよいよ寒さが極まってくる季節、正月を「春」ということに、無理があるように感じるのは、ひねくれ者のせいでしょうか。

ともあれ、年が改まるということは気持ちまでも一新されるようです。そこで雑誌の顔である表紙のデザインも改めさせて頂きました。昨年四月号より今の顔になりまして、まだ九か月ではありますが、タイトルの字が小さい、月の数字が小さいなどいろいろとご意見を賜り、年の改まったことを機に思いきって変更致しました。またいろいろご意見を頂戴致したいと思いますが、しばらくはこの顔で続けさせて頂こうと思っています。

また表紙の手ざわり、光沢等が変わったことにお気づきになられたと思いますが、これも新『浄土』から続けてまいりました。表紙へのPP加工（ビニールコーティング）を今号より取り止めることにしたからです。PP加工は手ざわりや、濡れても強いなど、本の体裁としてはまことにいいものですが、リサイクルを考えましたとき、大変大きな問題があることを知りました。それはこのPP加工紙が一冊あるだけで、その雑誌の束がすべてリサイクルに使われなくなってしまうという現状があることです。そのようなことから、イメージダウンを覚悟の上で、PP加工は取り止めることに致しました。どうぞご理解下さいますようお願い致します。

今年は会員の倍増を願って努力する所存です。また一年、どうぞよろしくお願い申し上げます。

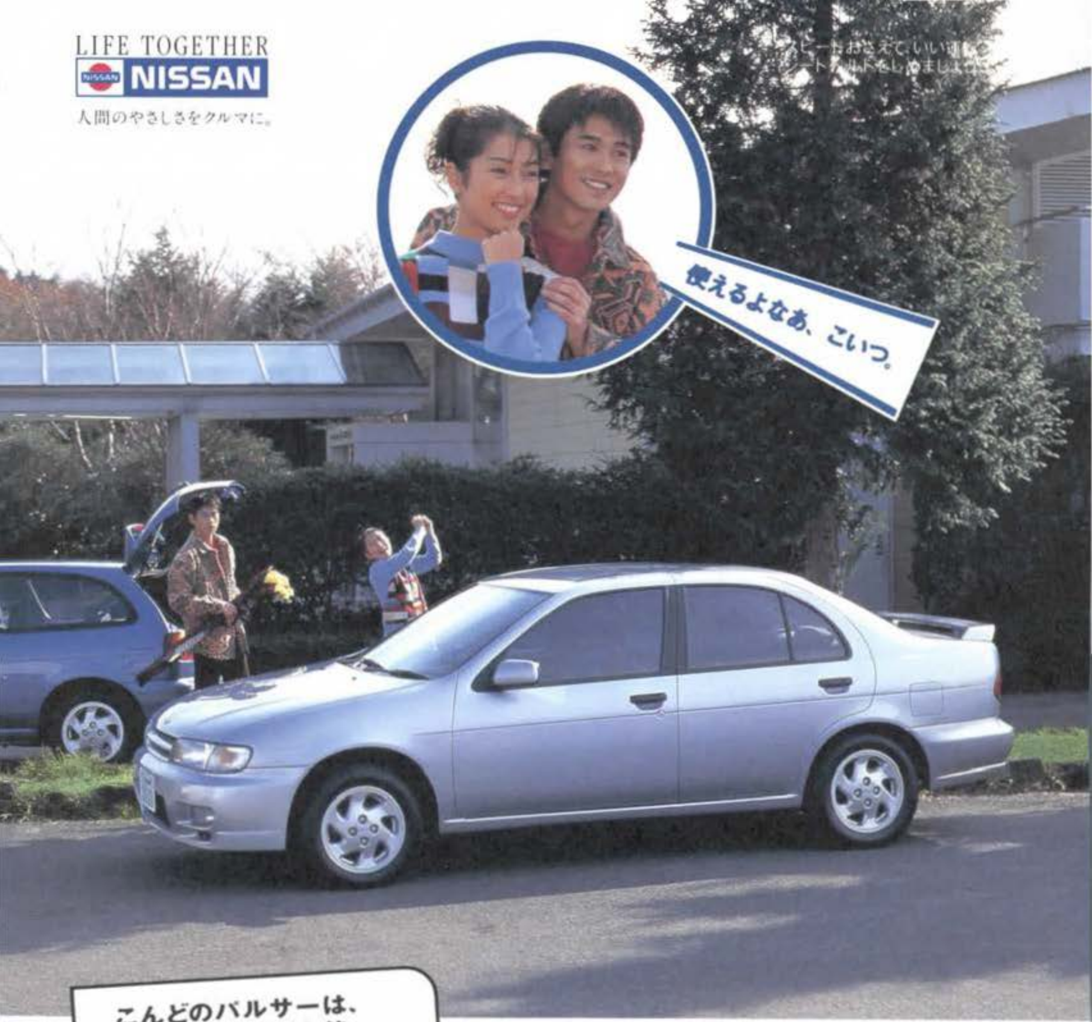
（長）

編集チーフ　長谷川岱潤
編集スタッフ　斎藤晃道
村田洋一
太田正孝
石上俊教
編集協力　オフィス頼伽代表佐山哲郎
編集顧問　大室了晧

浄土　六十二巻一月号　頒価六百円
年間費六千円
昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
印刷——平成七年十二月二十五日
発行——平成八年一月一日

編集人——宮林昭彦
発行人——牧田諦亮
印刷所——株式会社　平文社
写真植字——株式会社　シーティーイー

〒一〇五　東京都港区芝公園四－七－四明照会館内
発行所　法然上人鑽仰会
電　話〇三（三五七八）六九四七
FAX〇三（三五七八）七〇三六



こんどのパルサーは、たのしい新実用主義。

いろんな機能性に、ヨロコビがあるのが新しいのだ。それが、こんどのパルサーのたのしい新実用主義。しっかり遊ぶ、しっかり仕事する、しっかり生活する、Mr.しっかりのこれからを、気持ちよくサポートします。

これ安心
■運転席SRSエアバッグシステム全車標準装備。

NISSAN with AIRBAG

走る走る ●快走、マルチリンクビームサスペンション(リヤ)。●うれしい低燃費＝1500X1(5速フロアシフト)18.2km/ℓ、1500REZZOプライマリー(5速フロアシフト)19.8km/ℓ〔10・15モード燃費/運輸省審査値〕

らくちん ●上質感のある、しなやかな乗りごこち。●ゆったり室内スペース。

ツイてる ●新型エアコン。●トランク、ポケット等、収納性じゅうぶん。

パルサー4ドアセダン 1500CJ-Ⅰ(5速フロアシフト) **131.3万円**

パルサー4ドアセダン 1500X1(5速フロアシフト) **148.4万円**

上記価格はいずれも全国メーカー希望小売価格〔除く 北海道・沖縄〕

Mr.しっかり
新パルサー誕生

【Mr.しっかり】日常フダン活用。①新パルサーの別名。②新パルサーに乗る人の愛称。③〜状態……新パルサーでたのしい人生を送っている様子。

●PHOTO：パルサー4ドアセダン1500X1。ボディカラーはブルーイッシュシルバーM(#KG1)、スポーツパッケージはメーカーオプション。●希望小売価格はスペアタイヤ・標準工具付。寒冷地仕様は1.7万円高となります。●保険料、税金(消費税を含む)、登録等に伴う諸費用は別途申し受けます。●希望小売価格は参考価格です。価格は販売会社が独自に決めておりますのでそれぞれの販売会社にお問い合わせください。●日産自動車お客様相談室 全国共通フリーダイヤル 0120-315-232 ●お求めは、お近くのスカイライン、ブルーバード、日産チェリー各販売会社へ。

SAPPORO
その手にあなたの冬物語。
冬は物語をつくる名人です。ほかの季節にはない
銀世界や星空や暖炉を用意して、
人と人の新しい出会いをつづります。
サッポロ冬物語、ことしも出ました。あなただけの
物語を演出する、冬だけの生ビールです。
冬季限定醸造
SAPPORO
冬物語
冬季限定醸造
SAPPORO
冬物語
あきかんはリサイクルへ。ビールは、20歳になってから。
サッポロビール株式会社 ご協力のお願い：自動販売機による
酒類の販売は午後11時から午前5時まで停止されています。